

東海学園女子短期大学 辻 啓子

目的 高齢者にとって快適な被服が開発されるための資料を得ることを目的に、すでに、高齢者の着衣、すなわち外着および下着の調査を行い、その結果を報告してきたが、本報では、一日の生活時間の3分の1を占める睡眠時に着用されている寝衣について、種類、構成上の特徴および着用感について調査を行ったので、その結果を報告する。

方法 1)調査対象は、東海学園女子短期大学に在学する学生の家庭の65歳以上の高齢者とした。2)調査は、1990年11月に実施した。方法は、学生の母親に調査用紙を郵送し、高齢者に問うてもらった。有効回答数は、男子110、女子130である。3)調査内容は、①基本属性：性別、年齢、住んでいる所、家族構成、健康状態、睡眠時間、②寝衣：着替えの有無、服種、形状、素材、柄、着用感、購入および整理の担当者等である。

結果 1)調査対象者の87.9%は愛知、岐阜、三重県の在住者である。家族構成は、夫婦で子供家族と同居している者が男子は78.2%、女子は63.8%である。健康状態は、男女ともに約74%の者が健康である。睡眠時間は、男女ともに8～9時間が最も多い。2)寝衣を昼間の被服と区別している者は、男女ともに86%以上であり、健康者に多い。寝衣の形式は、男子は寒暖期ともにパジャマが多いが、寒期は和服式寝衣がパジャマをやや上回る。女子は寒暖期ともに和服式寝衣が約55%を占め、次いでパジャマである。3)着用感については、和服式寝衣は寒暖期ともに「着脱が便利」、「ゆったりしている」が、また、暖期は「肌ざわりのよさ」、寒期は「あたたかさ」が上位をしめ、パジャマは和服式寝衣にあげられた項目の他に、「洗濯のしやすさ」、「動きやすさ」があげられた。